

所属	心理学研究科臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2023 年度
氏名	菊地 佑太	指導教員 (主査)	高橋稔教授

論文題目	他罰性・自罰性が援助要請意図に対する利益とコスト予期に与える影響
------	----------------------------------

### 本文概要

大学生は、対人関係や学業など日常的に様々な悩みを経験するため(木村・水野, 2004), 悩みに直面した際に他者に助けを求める「援助要請」が重要な対処方略の一つになる(永井, 2010)。大学生においては、友人関係が特に重要な対処方略であると考えられている(永井, 2016;和田, 1998)。しかし、人は支援が必要な状態となったとしても、心理的な要因が関連し、援助要請を行うか迷うことがある。大学生が援助要請を行うかどうか葛藤する場面で、友人に対する援助要請の利益とコストの予期に基づく判断がなされている(永井・鈴木・2018)。その判断に関連する要因は、①ポジティブな結果、②関係の深化、③自助努力による充実感、④否定的応答、⑤秘密漏洩、⑥相手への迷惑、⑦問題の維持の計7因子がある。一方で、この援助要請の利益とコストの予期に影響を及ぼす変数として、他罰性と自罰性が挙げられる。他罰性は猜疑心バイアスと自己中心性バイアスとの関連があり(大淵, 2000)、自罰性は人間不信や対人緊張との関連があることが明らかになっている(角丸他, 2005)。以上のことから、攻撃性を表出しやすい者が悩みを抱えた際により初期段階で援助要請を図れることが出来るように、援助要請を抑制する利益とコストのメカニズムを明らかにすることは有用であると考えられる。

本研究では、大学生の攻撃性が友人に対する援助要請の利益・コストを媒介して援助要請意図に与える影響と攻撃性が直接援助要請意図に与える影響について検討することを目的とした。

大学生 215 名を対象として、攻撃性質問紙(安立, 2001)、利益・コストの予期尺度(鈴木・永井, 2018)、援助要請意図(木村・水野, 2004)の内容における質問紙調査を行った。

因子構造の検討のために、攻撃性質問紙、利益・コストの予期尺度、援助要請意図について確認的因子分析を行った。また、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した結果、良好な内的整合性が得られた ( $\alpha = .67 \sim .92$ )。攻撃性が利益・コストの予期を媒介して援助要請意図に与える影響と攻撃性が援助要請意図への直接効果が見られるか検討するため、パス解析を行った。「猜疑心」は「ポジティブな結果」に負の影響を与え、「ポジティブな結果」のみを媒介して援助要請意図に負の影響を与えていることが明らかとなった。「対象攻撃行動」「自責感」「自己破壊行動」は「否定的応答」に正の影響を与え、「否定的応答」のみを媒介して援助要請意図に負の影響を与えていることが明らかとなった。また、各攻撃性から援助要請意図への直接効果は見られなかった。

本研究の結果から、各攻撃性が高まった際に「ポジティブな結果」と「否定的応答」を予期し、援助要請しない意思決定を選択しやすいことが明らかとなった。この結果は、他罰性と自罰性の猜疑心や人間不信の傾向を反映したものと考えられる。これらのことから、悩みを抱えた際に攻撃性が高まった場合には、援助要請意図を促進するために猜疑心や人間不信に焦点を当てた介入をすることが効果的であると考えられる。

本研究結果の臨床応用として、既存の援助要請プログラムやセルフモニタリングへの応用が可能であると考えられる。他にも、医療相談機関における援助要請が困難な患者に対しても、専門家が本研究結果を説明と助言を行うことで、援助要請の意思決定を促進することが出来ると考えられる。

本研究の限界として、本調査において大学生の金銭的問題や身体・精神疾患などの重度な悩みを取り扱っていない。また、援助要請先による利益とコストの予期の影響を検討することも重要である。